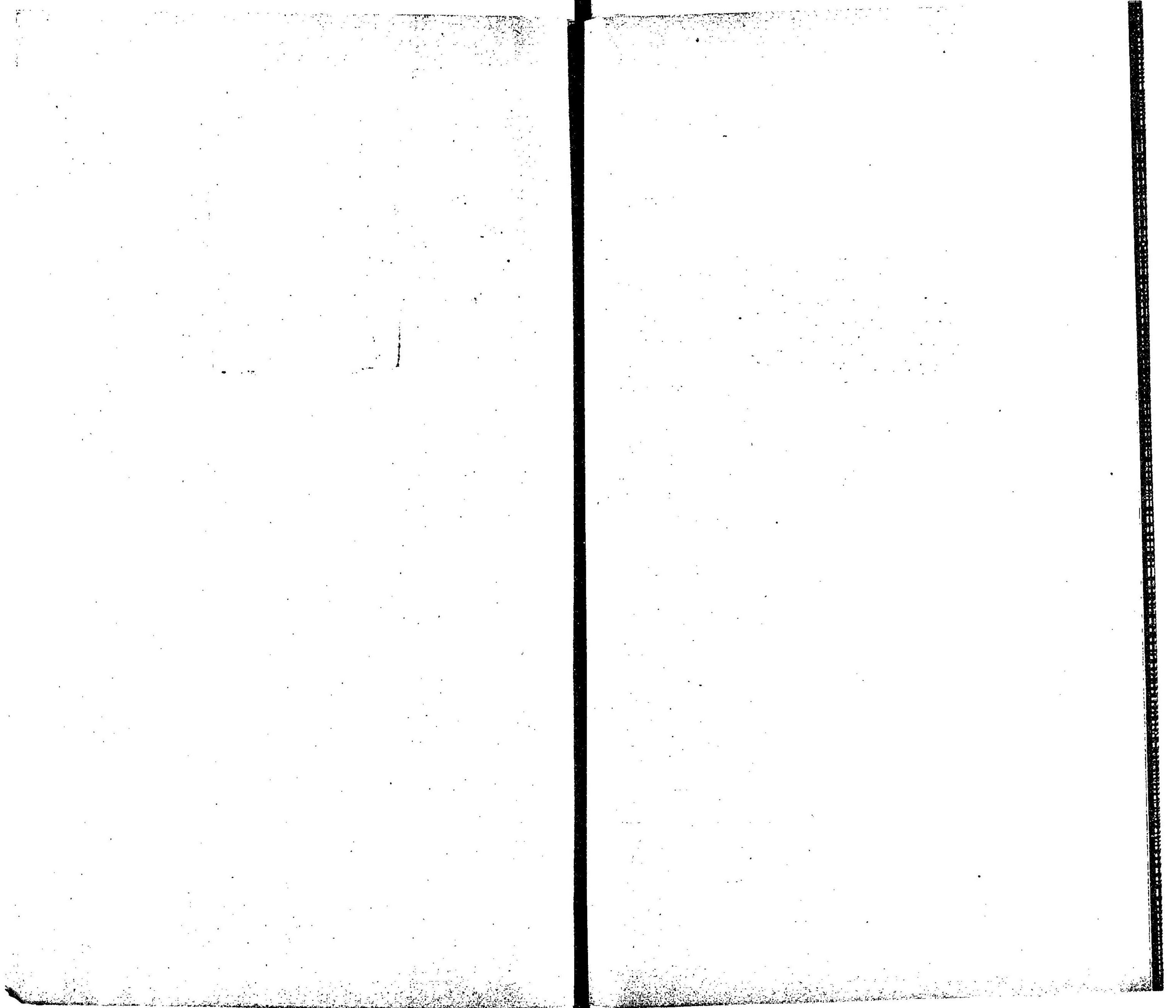


265
109



265
109



法
中
專
意
緒

博

明治
43. 6. 27
丙交

己酉初夏

柳江題



名和長年

玉蘭作

天に二日のひかりなく

地に二王のたのめなく

マニマニ一天萬乗の

君の御影のうばうだた

隠岐に遷らせ給ひより

世は常闇となりけるが

とげし雲の稍晴れ

ふたたびこゝに天目を

あぶぐ春こそ来りりれ

時ころころは元弘三年

閏二月の二十三日

月まつ程の暗らき夜に

たそれたほくゆ大君は

六條少將忠顯のみ

たご一人具したまひ

潜に御所を出でてせせて

山路をたどり谷を越へ

漸く五更のころに

千波の湊に著き給へば

忠顯濱邊を走せめぐり

伯耆の國にかへるべき

魚釣り船をかたらひつ

ヤガテみなどを出汐や

隠岐を離れて沖に行く

かめめにまかぶ浮舟は

ほまははいつい高御座

たかき日嗣の影を

行衛まはゆき海路かな

舳を見れば森茫と

眼界はてしなくなみの

ふなばたたたく鼓の音

浮きつ沈みろ舵まくら

浮寝の夢をむすぶ間も

ありに覺て鳴く千鳥

磯打つ浪もたとちかく

なりにげらげらな漢火の

ほ影ほのめくハ束穂の

稻津の浦に着き給へり

されば忠あき磯に下り

ところの翁を招き寄せ

此あたりには矢取りて

人に知られし者有やと

尋ねられても答ふづき

ふも白髪の海士にまへ

冷ねくねく人ぞ是れ

實に名にたふ里の名の

名和長年にぞ御座ける

まて忠顯の奏上に依り

ヤガテ勅使を交られて

長年に仰せられけるは

主上隠岐を出でさせ

今この浦に御遷座あり

長年の武勇を聞召され

御憑あるべきことの仰也

たのまれ進めらせ候や

いなや勅答あるべしと

にはかの宣旨蒙りて

忠義にあつま長年とは

天にものぼる心地つ

いそぎた人迎奉らんと

勅答申上げつとも

一族どもを呼びつと

軍備の次第を言ひ念め

たのれは主上の御迎に

稲津を指て出でにけり

斯く長年に拜謁を賜ひければ

ながと一砂上に九拜し

涙にむせび居たりしが

漸く仰いで首を上げ

世に有り難き勅命こそ

臣が一生の面目に候は

一族どもに諭旨を傳へ

船の上山に岩をかまへ

かりの御所となし奉り

軍備已に整置き候なり

假令要害は薄く候とも

ながと一が赤心をこぞ

鐵壁ともたほしめされ

睿慮御安く御座ませと

まことを色に現はして

いとたのも敷申しけり

さては俄かの御迎とて

御輿の用意あらざれば

長年主上を負ひ進らせ

船の上山にいそぎしが

折れぬ右手の山の端に

黒烟高くあがりければ

長年そなたを指さして

アレこそは長と一等が 館にてこれあり候し

一族こそつて行宮に 供奉する上はなかくた

ありて用なき物なれば 火を拭かせ候也申上れば

ま上深く感歎まじく

忘れぬよるべも浪のあら磯を

御ふぬのうつととめころは

斯くぞ御製を賜ひける 名はうづもれぬ長年が

忠義の程は立ちのぼる 烟ととめにあらはれて

消てぬ残るいとをぞと 末の世迄わかざるらむ

たきにたぐよふ天雲を 都のそらに吹きかす

御船みふねのうへの山やまおせに

三ツみの鱗うろこをちりぐに

碎くだまぐりて日の御影みかげ

輝あやく御代みよとぞなりにつる

輝あやく御代みよとぞなりにつる

明治四十三年六月十日印刷
全 四十三号六月二十五日發行

編輯人兼

大阪市東區和泉町二丁目一番地
有 村 彌 四 郎

印刷人

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 護 三 郎
電話東四五五九番

發行所兼

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 改 進 堂
長電話東二七〇番

265
109

